

西宮RC廣田宗玄様、米山奨学生金寛佑さん、ようこそいらっしゃいました。

今年の夏、プロ野球オールスター戦をTV観戦していると、打球角度、角度、飛距離のデータが映し出されていました。

プロ野球のデータ戦略が新時代に突入です。

最新鋭のデータ分析機器である高性能弾道測定器「トラックマン」を楽天が 2014 年最初に導入し、現在パリーグはロッテ以外の5球団セリーグは巨人とDeNAが導入しています。米軍の迎撃ミサイル「パドリオット」開発で生まれた技術を応用したデータ分析機器です。球界で長らく「切れ」や「伸び」など抽象的に表現されてきた現象が数字となって表れます。

パリーグでは西武の中継ぎ左腕、武隅投手のバックspin量がトップであることが明らかになっています。バックspinが多ければボールにはホップする力が生じます。投手リリース直後の「初速」に対し、捕手のミット際の「終速」が落ちにくくなります。実際にはホップするわけではなく投げた時に加速するわけでもありません。球のおじぎや減速が少ないこと、これが打者の目には「伸び」として映るのです。球団の方針で具体的な数字は非公開ですが「毎秒 45 回転前後」と言われ普通の投手は「毎秒 35 回転」、実に3割近くバックspin量が多いとみられます。140Km 前後の直球で押す投球、そしてそれを数字で説明するトラックマンのデータは「必ずしも球速を追い求めればよいというものではない」ということを示しています。直球は必ず外角低めを磨くべしという定説を見つめなおす一つのきっかけとも捉えます。極端な話、ど真ん中の方が5割増しになるという投手がいれば、そのコースを磨かせるべきです。どのコースが本当の武器になるか、トラックマンの数字が示してくれる可能性もあります。トラックマンはリリース時の投球角度やサイドspin量・バックspin量以外にも細かくデータを網羅します。トラックマンのはじき出す数値を分析した結果、今現在、日本球界で一番リリースポイントを前で放せているのは阪神の岩崎です。下半身の粘りを生かした独特のフォームで実測は 140km ですが、打者の体感速度は 155km の直球と同じだと言われています。阪神はまだトラックマンを導入しておりませんが、実際のデータが各投手に伝われば、今現在とは違った投球内容に変わっていくのではないかと期待します。

話は変わりますが、甲子園球場で初めて食べ物を売ったのが 1934 年ベイ・ブルースら大リーグ選抜チームが来場した時のホットドックです。ホットドックは俗語で「自己顕示欲の強いやつ」「目立ちたがり屋」といった意味です。

普段おとなしい阪神の選手もホットドックになるかもしれません。

それがいま 10 月であり、クライマックスです。

期待しましょう、ホットドックになることを！